

重伝建地区・有松とまちづくり

貴重な資源を持つ有松をどう支えていくのか

井澤 知旦

有松地区は平成二十八年七月二十五日に、国により重要伝統的建造物群保存地区（略して重伝建地区）に選定された。愛知県内で足助に次いで二番目であり、政令指定都市では京都、神戸に次いで三番目である。この貴重な地域資源をどのようにまちづくりや歴史観光に活かしていくのか、まちづくりと観光のバランスをいかにとっていくのか、課題は山積しているが、それらを考える素材を提供していきたい。

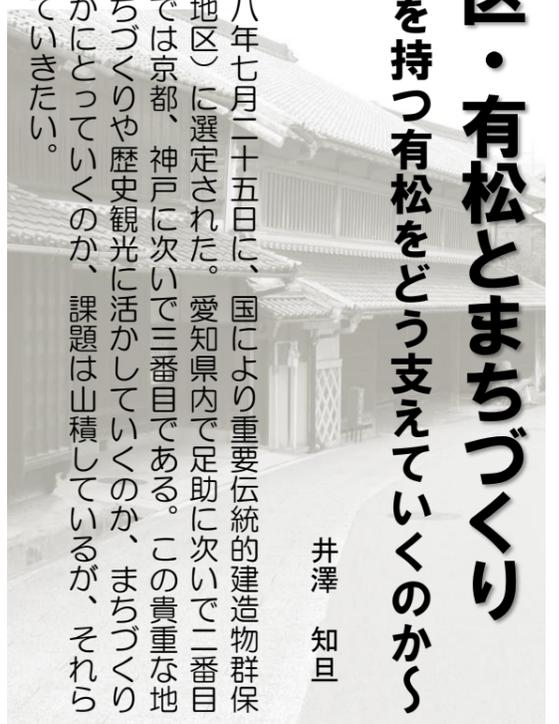
歴史を振り返る

有松地区は一六〇八（慶長十三年）年に東海道五十三次の池鯉鮒と鳴海の合宿として開村した。茶屋集落としてサービスを提供するも経営的に限界があり、耕地も少なかったことから、手織り木綿の絞染を考案し、それが街道を行き交う旅人に販売することで徐々に人気となり、街道一のお土産商品として評判を呼んだ。尾張藩はそこに目を付け、有松の絞り業者に営業独占権を与え保護したため、有松は発展していき、十八世紀後半には豪商の街並みが形成されていった。

しかし禍福織りなす世の中、有松も例外でなく、天明の大火（一七八四）により全村が焼失した。それ以降、村の復興が行われ、防火性能を高めるべく、屋根は萱葺から瓦葺に変え、うだつを上げて、漆喰塗籠の重厚な商家の町並みに変わっていった。一八〇〇年ごろまでに復興を終え、その姿が今日まで残る。

町並み保存

有松では、歴史ある町並みを保存しつつも現代にあった生活環境を整備・改善していくために一九七三（昭和四十八）年に「有松まちづくりの会」が発足した。近隣の妻籠や今井町でも町並み保存のための団体が組織化され、昭和四十九年にそれら三団体で「町並み保存連盟」を立ち上げ、翌年には「全国」に格上げする。



一九七八（昭和五十三）年に「第一回全国町並みゼミ有松・足助大会」が開催される。来年はちょうど四十周年となり、有松・足助で町並みゼミは開催される予定である。このように有松は町並み保存運動を牽引してきた。一九八四（昭和五十九）年に名古屋市の「町並み保存地区」第一号に指定された。

二〇〇一（平成十三）年には重伝建選定同意書を名古屋市に提出するもの、同意件数が少ないことを理由に却下された。しかしその後地道に運動を継続して、有松かわら版の発行や一里塚の再建、東海道無電柱化と交通規制などに取り組んだ。それらがようやく実を結んで重伝建地区に選定された。ちなみに足助地区は二〇一一（平成二十三）年選定なので、遅れること五年である。

歴史観光・町並み観光

旅行消費額は約二十五兆円（二〇一五年）に達することから、観光は地域振興の主要施策として注目されている。しかし有松地区は観光地としては貧弱であり、観光客の受け入れに向けた環境づくりは喫緊の課題である。確かに有松絞りまつりには大勢の観光客が来場するも、平常の土日でも観光客はまばらである。高山で二百五十万人、足助で二百万人（香風溪等を含む）、白川郷で二百二十万人であるのに対し、有松は絞り会館入場者カウン

トで二十万人を下回ることで、各種イベント集客を入れても三十万人を超えることはないであろう。

重伝建地区ではないが、大山の城下町（主に本町通）は六百メートル（有松は八百メートル）の町並みに多くの店舗が連なり、界隈を含め国宝・重文・登録有形文化財二十七棟が立地する。一九七三年に年間五十万人いた犬山城入場者数も二〇〇三年には十九万人に激減するものの、その後コトツツと町並みの保存・修復を積み重ね、名鉄との観光キャンペーン、城好きタレントや女鶴匠による話題づくりなどが功を奏して、今や五十三万人にも達し、完全復調している。平日のウィークエンドでも多くの観光客が訪れている。

地域でどう支えていくのか

観光地化が進むと飲食店や土産屋が増え、そこでの暮らしが見えなくなるし、快適な日常生活を送りたい人にとってはある意味迷惑である。

重伝建地区に選定された有松地区を中心に地域として今後いかなるまちづくりを展開したらよいかを有松学区の居住者に対して「ふるさとづくり」をテーマにアンケート調査を実施した（*）。

■まちの将来像 全体像は、「観光地と住宅地がうまく住み分けられていて、住宅地としては閑静でお年寄りが安心して暮らせるまち」がイメージされる。重伝建地区を含む町並み保存地区は観光地と住宅地の住み分けが一番多いものの、「オシャレなまち」や「にぎわい観光地」のウエイトが高い。

有松地区の観光地化対策とその不安

要望の多い対策は「トイレ・飲食のある休憩所の整備」、次いで、「観光イベントの開催（四季ごとの祭り等）」、「駐車場の整備」と続く。観光地としての休憩所や駐車場などの環境整備や集客できるコンテンツが求められている。

他方、観光地化への不安については、第一に「交通事故・渋滞」が全体の七割

を占めるほど大きい不安となっている。第二に「ゴミの不法投棄」が半数、第三は「犯罪」が三割であり、これらが三大不安となっている。町並み保存地区については「交通事故・渋滞」は最も少なく、むしろ「プライバシーの侵害」が突出している。

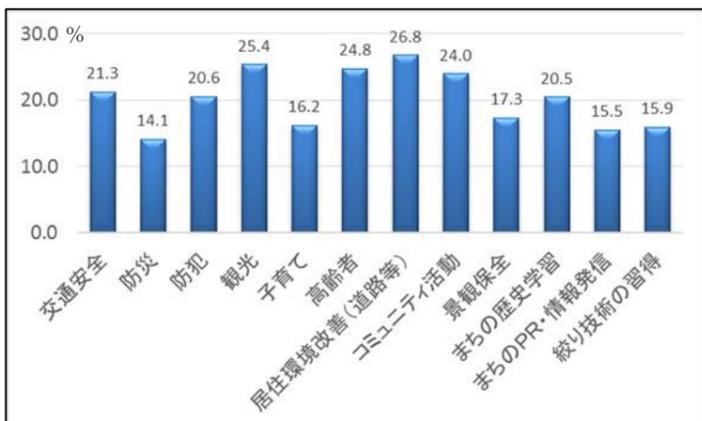
「自らも取り組みたい」や「協力したい」と積極的に関わりたい住民の取り組み事項で、最も多い項目は「居住環境改善（道路・公園など）」、「観光」、「高齢者」、「コミュニティ活動」、「交通安全」が上位5位となっている。（下のグラフ）

■自由意見・要望 ここに本音が出てくる。自由な意見や要望は約四百五十件が提出され、回答者比率は二割弱であった。日常生活のあり方として交通、環境、まちづくり、地域運営が指摘され、特に「交通」課題が住民の問題意識として強く上がってきている。観光推進に向けた意見・要望は全体の四分の一で、むしろ観光問題から波及する生活問題への指摘が多い。

今後の課題

次の四つに整理することができる。

- ① 共通認識としての有松地域まちづくりに関する長期ビジョンを策定
- ② 学区全体を見渡し、まちづくりを進める地域組織の設立と民主的運営の実施
- ③ 若い人々を含め、当事者意識の高い住民の参加を促進
- ④ 桶狭間学区との連携による観光資源の充実と生活環境改善に向けた行政連携



積極派のふるさとづくり取り組み事項

*この調査は有松学区区政協力委員会（調査票配布・回収）、有松まちづくりの会、有松桶狭間観光振興協議会、名古屋学院大学現代社会学部で実施し、筆者が取りまとめたものである。（サンプル数 2,648 票）



無電柱化前（上）と後（下）。電線がない分だけ上空がすっきりしている。名二環の高架が遠方に見え、町並みの阻害要素となっている。



上 服部家住宅（県文化財）
下 竹田家住宅（市文化財）